

第 1 回新潟市文化創造推進委員会 会議録

開催日時	平成 28 年 6 月 6 日（月）午後 2 時～午後 4 時 20 分
開催場所	新潟市役所本館 6 階 第 3 委員会室
出席者	<p>【委員】（50 音順） 石田美紀委員、伊藤聡子委員、今井美穂委員、太下義之委員、大谷剛史委員、 角地智史委員、迫一成委員、田中久美子委員、能登剛史委員、村山和恵委員 出席 10 名 欠席 1 名（丹治嘉彦委員）</p> <p>【オブザーバー】 新潟県文化振興課長補佐</p> <p>【事務局】 文化スポーツ部長、文化政策課長、文化創造推進課長、文化政策課長補佐</p>
傍聴者	1 名
報道機関	1 社
会議内容	<p>1 開 会 （司 会） ただいまより第 1 回新潟市文化創造推進委員会を開催します。 委員の皆様におかれましてはお忙しい中お集まりいただきまして誠にありがとうございます。私は司会を務めさせていただきます文化政策課長補佐の南雲でございます。よろしく願いいたします。はじめに新潟市文化スポーツ部長の山口からご挨拶をさせていただきます。</p> <p>2 文化スポーツ部長あいさつ （事務局） 文化スポーツ部長の山口でございます。よろしく願いいたします。 この 4 月に文化スポーツ部長を拝命させていただいたところです。この会に期待することは、皆さまからいろいろなアドバイスをいただきながら、行政と皆さま両輪となっていていろいろな取り組みのきっかけを作ればよいなど思っているところでございます。</p> <p>改めまして、皆さまにはお忙しい中、本委員会の委員をお引き受けいただきまして、ありがとうございます。まず、本市の文化創造のこれまでの取り組みですけれども、今回、文化創造都市ビジョンの改定をこの 1 年でしていきたいというところです。実は、前にも文化創造都市ビジョンがございまして、こちらについては平成 24 年 3 月に策定をしております。この策定を基に本市としましては水と土の芸術祭であるとか、ラ・フォル・ジュルネ音楽祭、そしてマンガ・アニメを活かしたまちづくりなど、新潟らしい地域特性を活かしたもの、そういった取り組みを推進してまいったところでございます。そういったこともありまして、平成 25 年には文化庁から長官表彰をいただき、</p>

平成 26 年には日仏交流優良賞、そして平成 27 年には東アジア文化都市の日本代表ということで選定をいただいたということで、文化庁であるとか、外からはそれなりの評価をいただいているのかと思っところでは。

また、今年の部分ですけれども、この 4 月に日本遺産という制度でしょうか。新潟市だけではなく三条市、長岡市、十日町市、そして津南町という 5 市町とのもとで、信濃川流域の火焰型土器と雪国文化、これが日本遺産に認定されたということもありますし、また別途、食文化の取り組みが非常に評価されていて、ウィラーグループさん、市長があちらこちらで盛んに今、PR もさせていただいているところではすけれども、民間によるレストランバスの運行も全国に先駆けて始まったと。そういったような取り組みもまた新たに始まっているといったようなところではございます。

今回の文化創造都市ビジョンですけれども、こういった状況を踏まえながら、今後 2020 年の東京オリンピック・パラリンピックの大会、それからやはりまち・ひと・しごと、地方創生という中で、雇用であるとか経済、そういった部分にも継続的につなげていきたいなという思いもありますし、そういったような観点から、次の文化創造都市ビジョンを策定できればいいなといった思いが非常に強いところではございます。

また、今年には 4 年に 1 度のオリンピックの大会ということで、ブラジル、リオデジャネイロでしょうか、まもなく大会が始まりますけれども、これが終わると、4 年後には東京の大会がやってくるということで、これは後ほど太下さんから詳しくいろいろと教えていただく時間をお願いしていますけれども、スポーツだけではない大会だと。文化の一大祭典でもあるということで、東京五輪に向けて地方も 4 年間文化プログラムというものを取り組んでいこうという動きもあるところではすし、我々も地方の拠点として取り組んで行きたいということも予定しているところではす。

皆さまからは、これからは大きなものとして東京オリンピック・パラリンピックがございすけれども、そういった以後のことも見据えながら、私どもの文化創造についていろいろご意見を賜りたいと思っところではす。

そういった思いもあり、この会を設定させていただいたということでございすので、よろしくお願いいたします。

(司 会)

では続きまして、事務局をご紹介させていただきます。文化政策課長の中野です。

(事務局)

中野です。よろしくお願いいたします。

(司 会)

文化創造推進課長の塚原でございす。

(事務局)

塚原でございす。よろしくお願いいたします。

(司 会)

本委員会は公開の会議とさせていただきます。会議録作成のために録音させていただきますことをご了承ください。また、このあと皆さまから自己紹介をお願いしたいと思っております。ご発言に際しましてはマイクをご利用いただきたいと思いますが、そちらの各テーブルの上にご置きますマイクのボタンを押して、ランプがつかますので、ランプがついていることを確認していただいたうえでご発言をお願いいたします。なお、今日、村山和恵委員が30分遅れる旨、ご連絡をいただいておりますので、お伝えいたします。

皆さまに机上配付させていただきますが、『新潟市民文化遺産ガイドブック』という冊子、文化政策課で作成したものを載せさせていただきます。こちらは3年間にわたり、新潟市の各地元の皆さまから文化財までいかないけれども、地域の大切な宝として受け継がれているものなどをご推薦いただいたものを取りまとめた冊子でございます。今日のこれからの意見交換の際にも何かヒントになるようなものがあるかもしれませんので、どうぞこちらもお持ち帰りください。

3 委員自己紹介

(司 会)

これから自己紹介をお願いしたいと思いますが、五十音順でお願いしたいと思っております。恐れ入りますが新潟市の文化に関連する活動などにも触れていただきながら、お一人3分程度ご紹介をお願いいたします。丹治委員が本日ご欠席でございますのでご報告いたします。それでは石田委員からお願いいたします。

(石田委員)

新潟大学の石田です。所属学部は人文学部で、研究分野は映像文化です。クールジャパンという言葉とともに、アニメやマンガというのがものすごく大衆文化、それから世界の人々に対してアピールがあるというような認識は皆さんすでにお持ちかと思っておりますけれども、大学の研究、そして教育の中でもアニメやマンガといったサブカルチャー、非常に大きなウエイトを占めてきて、求心力を持ってきた領域になっています。

本学でも、昨年度10月に開催された第6回がたふえすに学生とともにボランティアとして入って、地域のイベントとしてアニメとマンガを、両方がいい形で発展するにはどうかというような視点からスタッフを務め、それからそれについて報告、研究調査をやってきたりとか、そういうような授業を積極的に進めています。とにかく商業的な効果ということがまずはやはり求められるかと思うのですが、大学のアーカイブ活動というか、データベースというか、知識の蓄積とそれから次の世代への継承という点から、新潟市の文化政策については大変興味を持って参って参りました。ですので、皆様と

活発な意見交換できればと思っております。どうぞよろしくお願い申し上げます。

(伊藤委員)

こんにちは。伊藤聡子と申します。フリーキャスターで、こちらの新潟市のほうでは駅前にあります事業創造大学院大学で客員教授も務めさせていただいているのですが、皆さんとはメディアを通してお会いする機会が多いのですが、実は全国の中小企業とか地域活性の取り組みなどを取材させていただいて、講演やメディアを通じてお伝えしているという活動もしております。私自身は高校卒業まで新潟市内で育ちまして、新潟市には非常に思い出もあるわけなのですけれども、外から見ていてとてもいろいろな新しい取り組みをしていて、文化としての一面も持ち合わせたすごくいいまちになってきているなという感じがしているのですけれども、せっかくだったらこのいいものを、やはり地域の活性化とかそれから経済の活性化というのにつなげて、世界の新潟になってほしいなという思いがあるので、そういうビジネスの視点でも考えていきたいと思っております。よろしくお願いいたします。

(今井委員)

今井美穂と申します。肩書きが、したみちオフィス（株）代表取締役となっているのですけれども、普段、会社経営もしているのですが、普段は地域活性化モデルと名乗って、地域でのタレント活動を主に行っております。私自身、6年ほど前に普通の一般のOLをしているときに、ミス十日町雪祭りの経験が1年ありまして、やはり新潟の若い子たちが地域について知らなすぎる。私もそうだったのですけれども、やはり知るきっかけがないのではないかと思ひまして、それから地域活性化モデルという起業家の活動をスタートさせました。

現在は、ここに書いてあるとおり、食、地域、スポーツ、幅広いジャンルで活動しているのですけれども、普段は私が6年前に立ち上げましたガールズ集団がありまして、新潟ガールズ集団リリーアンドマリーズという女性チームを作りまして、今約80名、下は小学生から40代のお母さんまでいるような団体を立ち上げたのですけれども、毎月その女の子たちで集まってディスカッションをする中で、地域を盛り上げるイベント企画ですとか、商品開発とか、地域の行政の皆様と企業の皆様の間で立てるような、社会的な団体になっていきたいということで、女の子たちならではの活動しております。今日、資料も事前にいっぱいいただいたのですが、ここに書いてあるような難しいお話は、普段、なかなか専門的にはしていないので、あくまで市民の女の子の立場でこの後の会議も参加させていただければうれしいかなと思いますので、よろしくお願いいたします。

(太下委員)

私、東京からまいりました。東京で総合シンクタンクに勤務しております

て、文化政策の研究を専門にしています。新潟市とはいろいろな接点が今までもございまして、今何があったかなと思ってあげてみたのですが、前の文化創造都市のビジョン作りの時も若干お手伝いさせていただきましたし、後は新潟はマンガ・アニメの作家が非常に多い。なぜかたくさん輩出しているまちですけど、マンガ・アニメでの地域活性化の委員会の委員長も仰せつかっています。あと、旧二葉中学校を創造拠点にしていくという委員会の委員もやらせていただき、あとは、去年「東アジア文化都市」というのをやっていたんですけど、これの委員もやらせていただき、新潟市が官民中心で作った文化・スポーツコミッションという組織がありますけれども、これのアドバイザーもさせていただいているということで、いろいろお役目をいただいて新潟の文化振興中心ですけども、参加させていただいていました。

私自身は東京の人間なので、新潟とは直接地縁血縁なかったのですが、そんなわけでここ数年、何回も新潟にお伺いする機会があって、ぜひこれからの新潟の文化振興をちょっとお手伝いできればなと思っております。どうぞよろしく願いいたします。

(大谷委員)

初めまして。日本旅行業協会の新潟委員長を拝命しております大谷と申します。肩書きが二つありまして、東武トップツアーズ(株)新潟支店長という二つの肩書きを拝命しておりますけれども、なかなか皆さん日本旅行業協会というものをご存じない方、多いかと思うのですが、これは旅行会社が所属している日本全国にある第三者機関のようなものでしょうか。管轄自体は観光庁及び国土交通省となっておりますので、さまざまな部分で法律整備等々、いろいろな部分での意見、上申等々ないしはご指導をいただいているという状態になっております。

昨今ですと、皆さんご存じなのは貸切バスの事故が最近頻繁にございますけれども、そういった部分の法整備の国交省等々への上申及び提言をしているような、ないしは消費者の皆さんからのご旅行に対するさまざまなご提言をいただいているというような団体という形でございます。皆さんから旅行商品等々に関して不明な点があれば何なりと私宛にお問い合わせをいただければと思います。もう一つは東武トップツアーズ(株)という旅行会社の新潟支店長を拝命しておりますけれども、先ほどオリンピックの話がありました。オリンピック、東京オリンピックに関しては日本の旅行会社で3社、当社を含めて3社のみチケット及びその他のお取り扱いをするということが、先般3月31日に発表になりました。そういった意味で文化創造及びスポーツの部分でも当社としてすでにJOCに20数名派遣をしておりますので、また必要に応じて皆さんのほうにご意見ちょうだいしたいと思いますので、ぜひよろしく願いいたします。以上です。

(角地委員)

初めまして。アートキャンプ新潟の角地智史と申します。よろしくお願

いたします。僕は二つ肩書きがありまして、一つはここに書いてありますアートキャンプ新潟という障がいとアートの創作活動を支援する市民団体を行っているということが一つと、もう一つ。自分は写真家として作品制作をしております。今年の2月から4月に新潟市の美術館で「アナタにツナガル」展という展覧会があったのですが、そこに自分の作品として出品させていただいた活動しております。

もう一つ、アートキャンプ新潟という団体についてなのですが、2013年、14年に立ち上がった、まだまだ始まったばかりの団体でして、障がいのある息子さんが書いた書を親御さんが展示する機会を作りたいという思いから立ち上がった団体です。主に年に1度、アートキャンプ新潟というタイトルの展覧会を行っているのですが、だんだんとその活動が広がってきまして、現在、福祉施設職員さんを対象にしたセミナーを開いたりですとか、ワークショップ、施設に伺ってアート活動に対するワークショップなどを行っております。今回の新潟市の文化創造委員としては、自分としてはその福祉現場の声を届ける役割を担えたらなという思いで参加させていただきます。どうぞよろしくお願いいたします。

(迫委員)

ヒッコリースリートラベラーズの迫と申します。私は、すぐ近くなのですが、白山神社の門前町になります上古町商店街というところで2004年からヒッコリースリートラベラーズという、デザインだったり商品開発だったりをする雑貨屋みたいなものを行っております。上古町商店街の副理事長もさせていただいていて、思いがけずまちづくりに巻き込まれたというか、そういう立場ではあるのですが、その中で知らないことを皆さんに発信したりとか伝えることでまちが変わっていくのだなと、非常に体感しております。

例えば空き店舗が25パーセントくらいあった上古町も、いろいろやっていく中で3パーセントくらいまで下がったりとか、地域のあまり注目されてなかった商品とか雑貨とかに光を当てて紹介することで、急に売り上げが伸びたりとか、新潟に昔からある、ゆかりというお茶に浮かべるお菓子なども、店頭での年間のうちで1,000個くらいだったのですけれども、跡継ぎがなくて76歳のおじいちゃんが一人で作っていて、危ないというか、もうそのお菓子が食べられなくなるかもしれないところから、勝手にお話をしてデザインさせてもらって流通を作ったところ、初年度で30,000個くらい売れて、今年60,000個くらいのペースで忙しくなって、娘さんが手伝いだして、そのだんなさんが作り始めて、今度は売り場を広げようかというところまでなっています。

そういうふうに、地域らしさというものにちゃんと気付いて、デザインだったり流通を作ること、ものは残せるんだなと非常に感じているので、そういうことがもうちょっとできていくと面白いなと思っています。あと雑貨屋という店舗経営と、新潟市美術館のミュージアムショップなどもやってい

ますので、そこでものを売るとか買うとかという行為の中に、文化らしさとか地域らしさというのを含ませることが可能かと思うので、そのへんのお手伝いができればいいなと思っています。どうぞよろしくお願いいたします。

(田中委員)

田中久美子と申します。クオリスとって、安兵衛が一番古い店舗なのですが、長岡と柏崎のほうにもありますけれども、50 数年新潟市でやらせていただいております。

今日は新潟商工会議所の女性会の副会長という立場でお呼びいただいたと思います。私、文化ということについては、普段、市民が豊かに過ごすためのものだと思っておりましたけれども、旅行に出まして、鳥取に始まりまして、鳥取、島根、山口、広島とこう下りてまいりまして、それぞれにあそこは歴史のすごくあるところで、天橋立、島根は出雲大社、山口は吉田松陰さんのところとかいろいろ、萩とかありまして、広島に来れば安芸の宮島とか、そういう文化遺産、歴史遺産がたくさんあり、それと新潟と比べますとこれはやはりちょっと勝てないなという想が強くなりました。

じゃあ新潟っていうのはどうなんだろうと見たときに、過去のどうのこの、新潟市ですよ、新潟市で見たときに過去のその遺産というものに頼っているのじゃなくて、ラ・フォル・ジュルネとかありましたけれども、今、酒の陣でも人を呼べますし、そういうふうに民間のジャズを今、年間2回開催している、そういうことを作っていくことによって、毎月新潟って市民の人が何か楽しいことやっているんだよね、毎月何か行くといいんだよねということでも、今はものよりことのほうに地元の人と、私は旅行したときには人とのふれあいはあまりありませんでした。過去の歴史の遺産とのふれあいはありましたけど。そういう意味ではツアーで行きましたから、ガイドさんとのふれあいはありましたけれども、地元のお土産屋さん以外はありませんでしたので、そういう民間から、とくに民間から立ち上がったジャズのところに行けるみたいなものを、ずいぶんこれから活用できるといったらおかしいですけども、活かしていけるんじゃないかという想いを強くいたしました。よろしくお願いいたします。

(能登委員)

皆さんこんにちは。最近、僕、よく太下委員の論文をよく読み、勉強させていただいております。その中ですごくいい言葉があって、毎回記憶に残っていたのです。今日皆様のご挨拶を聞きながら、やはりそれだなと思っでちょっと一言なのですけども。イノベーションとは、技術だけではなくて全く新しいものの見方にあると。それをいかに世の中で育てていくかというのが、今後文化政策または地域を豊かにしていく中で非常に大切であると書いた、その文字がピカピカ輝いていまして、これだなと非常に強く思っております。

近年、新潟、文化については非常に東京の人とか県外の方々から、何か新

潟ってにぎやかだよねというふうに言われるのも、ソフトコンテンツが非常に豊かでありながら、そういった人々、新しいものの見方をはぐくむような人々を次の世代に受け継いでいるのかなというふうに思っております。というのも私、ソフトコンテンツばかりをやっておりまして、にいがた総おどり、今年おかげさまで15周年目を迎える踊りの祭りですし、アート・ミックス・ジャパンというのが先月5月に開催されまして、伝統芸能の一大祭典。今年の12月には、海外開催が決まっております、そういったものと、25年目になる食の陣も昨年から実行委員長を仰せつかって、がんばらせていただいております。よろしくお願いいたします。

そういったソフトコンテンツに触れることで、人々が驚いたりびっくりしたり楽しんだり、そしてまた、中には喜怒哀楽がそこに混じる中で、新しい感性というのが自然発生的にクリエイティブなことが新潟は新しい目線で見えていって、全く新しいビジネス、全く新しい伝統芸能、または全く新しいハート、そういったものが繰り広げられていく、そんな新潟になってくれたらいいなと思っています。今日はよろしくお願いいたします。

(司 会)

ありがとうございます。本委員会には、オブザーバーとして新潟県文化振興課からご出席いただいておりますので自己紹介お願いいたします。

(オブザーバー)

県の文化振興課の柴田と申します。この4月から文化振興課に来まして、今まで文化にかかわったこともなく、これまで国際関係の課に通算で6～7年くらいいましたし、その前は空港課とかそういうところにいたので、全然かわりがなかったのですが。元々のイメージが伝統芸能だとか芸術だとか、そういうふうなイメージを持っていたのですが、来てみると、文化って食文化だとか生活文化だとかマンガだとか、割と幅広に扱っているなどというようなことに気付いたり、例えば今日、こういう本が配られましたけども、普段から私、休みの時にぷらぷらとこういうところ歩いて写真を撮ったりなんかしていたのは、実はけっこう文化的なことをやっていたんだな、なんて改めて気付いたりして、ちょっとほっとしているようなところです。ということで、皆さんから半分勉強みたいな形で参加させていただきますがよろしくお願いいたします。

(司 会)

それでは村山委員、自己紹介を、普段の活動など入れて3分程度でお願いできますでしょうか。

(村山委員)

承知いたしました。皆様、初回にもかかわらず講義の関係で遅れてしましまして申し訳ございません。村山和恵と申します。普段は新潟青陵大学短期大学部で教員をしておりますが、その傍ら、日本酒を普及推進する活動の一環として、女性の日本酒愛好家のコミュニティ、「にいがた美醸」というもの

を主催しております。日本酒を切り口として、地域のさまざまないいところに触れる活動をして早7年経ちまして、会員数 180 名になっております。そのほか個人としても日本酒を普及推進する活動で、あらゆるところの皆様にお世話になっております。このたびはご一緒できますことを大変光栄に思います。よろしく願いいたします。

4 委員長、副委員長選出

(司 会)

ありがとうございました。それでは次第の4、委員長、副委員長選出です。委員の皆さまからご意見ございますでしょうか。もしご意見なければ、事務局の案としまして、前回の新潟市文化創造都市ビジョンの策定の際にもアドバイザーとしてご参画くださいました太下委員に委員長を、また昨年開催しました水と土の芸術祭 2015 アート部門ディレクターを務めていただいた丹治委員に副委員長をそれぞれお願いしたいと考えておりますが、委員の皆さまはいかがでしょう。

(異議なしの声)

ありがとうございます。それでは委員長を太下委員、副委員長を丹治委員をお願いいたします。なお、丹治委員からは委員長、副委員長の選出について事務局にご一任をいただいております。それでは太下委員長にはお席の移動をお願いいたします。

続きまして意見交換に移りますが、意見交換に入る前に事務局より提案がございます。先ほど部長からも挨拶の中で触れさせていただきましたが、本委員会では、文化創造都市ビジョンの見直しや、その他文化創造の推進に関してご意見やご提案をいただきますが、4年前のビジョン策定時には想定していなかった動きがさまざま出てきております。その一つとして2020年の東京オリンピック・パラリンピックの開催と、文化プログラムへの取り組みという新しい動きがあります。新しいビジョンの中でも、文化プログラムにも触れていくこととなります。

そこで初回となります今回は、意見交換に先立ち、オリンピック文化プログラムについて、太下委員長より約15分程度ご紹介いただきたいと思います。いかがでございましょうか。よろしいでしょうか。

それでは太下委員長よろしく願いいたします。

(太下委員長)

委員長を仰せつかりました太下です。改めましてよろしく願いします。

皆さんにご議論いただくに当たって、オリンピックの文化プログラムについてお話をしたほうがいいかなということで、実は、今日、私、朝から新潟市に入っています。午前中、市の幹部の皆さんを前に経営助言懇話会とい

うのがあるのですけれど、そこでこのオリンピックの文化プログラムのお話をしたのです。ただそれは、ずっとお話をしていきますと1時間半くらいかかってしまいますので、それをやっているとこの委員会終わってしまいますから、そのダイジェストで文化プログラムのお話をこの場でさせていただきたいと思います。

15分ですから、ポイントを三つにまず絞ってお話ししたいのですけれども、一つ目のポイントが、オリンピックといいますと、皆さんスポーツの祭典というふうに思われると思うのですね。それ自体はもちろん間違いではないのですけれども、実はこのオリンピックというものは、スポーツの祭典であると同時に文化の祭典でもあるという点が、非常に大事な第一のポイントです。実はこのオリンピックの開催に当たっては、この話題となっています文化プログラムというものの実施が義務付けられています。

そもそも論でいいますと、近代オリンピックのことですけれども、これを提唱したフランスのピエール・ド・クーベルタンという男爵がいますが、彼が言っているオリンピック、その原点にあるオリンピズムという、オリンピック精神ということを行っているのですけれども、オリンピックというのはスポーツと文化と教育が融合したものだと言っています。もともと構想の極めて原点から、このオリンピックというものには文化の要素が入っているということになります。

ここに177という数字が出てきましたけれども、単位は千と考えてください。177,000、何の数字かといいますと、今現在でいう直近のオリンピック、これは4年前の2012年ロンドン大会になりますけれども、このロンドン大会のときに行われた文化プログラムの総数、これが177,717件という膨大な数の文化プログラムが行われています。例えば、この間亡くなりましたけど、日本の演出家の蜷川幸雄さんの作品ですけれども、イギリスが生んだ世界的な文豪、ウィリアム・シェイクスピアがいますけれども、彼には現時点で37の戯曲が確認されています。この37の戯曲を37の国、地域の劇団で上演するという、いかにもイギリスらしいプログラムが行われました。

今日せっかく角地委員もいらっしゃっているので、この「Unlimited(アンリミテッド)」と題されたプログラム、これが非常にこのロンドン大会のときに注目を浴びたプログラムになります。これは何かというと、身体障がい者による芸術表現の可能性を開拓した一連のプログラムなのです。なのでこの「アンリミテッド」、限界なんかないというこのプログラムの中に、いくつかのプログラムが含まれているのですけれども、今、写真でご覧いただいているのは、スー・オースティンという足の不自由な女性ダンサーですけれども、彼女はもともとは普通の舞台の上で車いすのダンスをやっていたのです。ただ、やはり車いすのダンスというのは、どうしても健常者のダンスと比較して車いすそのものが、どんなに改良していても一種のハンディといえますかバリアになっていく。その中で、彼女はあるときふと、水の中でダンス

をすれば、浮力も働くのでもっと自由なダンスができるのじゃないかと考えたわけです。もちろん、実現は大変ですよ。普段だったら「そんな難しいことと言わないでよスーさん」という話になったのだと思いますけれども、やはりこのオリンピックというものは、なかなか体験しようと思っても体験できない貴重な機会になるわけです。

ご案内のとおり、前回日本がオリンピックを体験したのは1964年で、今度は2020年。半世紀ですね。この間隔で考えると、おそらくこの部屋の中にいるほとんどの方が、現役でオリンピックを体験できるのは2020年が最初で最後になるんだと思います。実はロンドン大会のときも、さまざまなことを行っていくうえで、あるキャッチフレーズが使われていまして、“Once in a lifetime”、「一生に一度なんだからさ」という、こういうキャッチフレーズが盛んに使われたのです。おそらくスー・オースティンのプログラム、「フライング・フリー」と題されましたけど、これもこのオリンピックの機会でなかったら、ちょっと我慢してよとかで終わってしまった話かもしれないアイデアが見事結実したという形になっています。

ちなみにこれは YouTube でも映像が上がっていますが、本当に美しいパフォーマンスなのです。若干大げさな言い方をすると、今まで人類が見たことがないような、そういう新しいダンスになっているわけです。こういったものがオリンピックの文化プログラムから生まれてきたわけですね。その結果イギリスの国民は、障がい者による芸術表現というのは非常に重要な領域だということ認識して、結果として、今も「アンリミテッド」というプログラムは続いていますし、さらに言えば、日本が2020年に向けて文化プログラムやるというときに、障がい者の芸術表現というものもものすごく重要な分野だというふうに、今、文化庁でも位置付けられています。そんなインパクトもあるわけです。

ちなみに非常に大事な点として、文化プログラムというと、どうしてもイベントがたくさんあるんだというふうに思ってしまうかもしれません。177,000件という話もしたので。確かに見え方としてはそうなのですが、この「アンリミテッド」が一つの象徴なのですが、非常に重要なのは、単なる一過性のイベントではないということです。「レガシー」というキーワードが、今、非常にIOCが重視しているキーワードになっています。レガシーとは、よく遺産というふうに訳されます。ただ遺産といっても、別の英語で「ヘリテージ」という言葉がありますよね。このヘリテージというものが本当に古いものの遺産というイメージなのに対して、レガシーというのは過去から現在、そして現在から未来へ引き継いでいく大事なものという、そういう感覚だと思います。

すなわち見え方としてはイベントになるのかもしれないけれども、日本にとってみると2020が終わった後、それが例えば新潟なり日本という社会にどういう効果、影響を残せるのか、これが非常に問われているのです。とい

うことで、ぜひ後続くようなものとしていろいろ考えていく必要があると思います。そんなことで、いろいろな文化プログラムが行われてきましたということが非常に大事な点で、ロンドン大会のときは 177,000 件も文化プログラムが行われました。

日本はどうかということ、去年の夏に文化庁が文化プログラムに関しての基本構想を公表しています。字が小さいので見えにくいかもしれませんが、真ん中あたりに赤字で文化プログラムの数値目標が書かれています。20 万件のイベント、これはロンドンを超えるという意気込みですね。20 万件のイベント、5 万人のアーティスト、5,000 万人の参加、訪日外国人旅行者数 2,000 万人に貢献。最後は難なくクリアされてしまいそうですけれども、20 万件ということで、ロンドンを超える史上最高の文化プログラムにしますと。5,000 万人の参加、これもすごい数字ですね、これもロンドンのときの 4,340 万人という数を超える数字設定になっています。5 万人のアーティスト、これもロンドンの時は 4 万人ちょっとだったので、これを超えるという設定なのですけれども、5 万人のアーティストというのはどのくらいの規模感かということ、本体のオリンピックの競技大会に、アスリートは何人参加するのということ、実は IOC が大会の肥大化を避けるために人数の規定をしているのですけれど、ざっくり言うと 1 万人です。というわけで、一概に比較はできませんが、オリンピックそのものに参加するアスリートの約 5 倍のアーティストが、この文化プログラムに参加することになるという規模感です。今のが一点目です。要は、オリンピックというのは、スポーツの祭典であると同時に文化の祭典でもある。

二点目、東京オリンピックというタイトルがついているので、また東京ですかみたいな話になるのですけれども、実は文化プログラムに関しては、東京はもちろん、さまざま実施されるでしょうけど、東京以外、日本全国で文化プログラムは実施されるということになります。実際ロンドン大会の時もそうだったのですね。ロンドンでも実施されましたけど、イギリス全土で文化プログラムが実施されました。

これに関連して、今日せっかく大谷さんも来られているので、観光振興にダイレクトに直結するのですね。あまりご存じない事実かもしれませんが、文化庁と観光庁という二つの庁があります。これが包括的連携協定というのを締結します。スポーツ庁というのを立ち上げましたから、今、三者協定になっていますけれども、なぜ文化庁と観光庁が包括連携協定を結んだのかと、中央省庁同士が連携協定を結ぶというのはあまりほかに例がないわけです。一民間人からすると、協定を結ばないと一緒に仕事ができないのかなという気がしなくもないのですけど。

それはさておき、これはなぜ結ばれたのかということ、実は観光庁の当時の長官、写真で言う左側に写っている久保長官が、新潟に来られたときに文化プログラムというものがオリンピックであるのだと。イギリスの時は全国で

開催されたということを知り、これは確実に観光振興につながると考えたわけですが。観光庁から文化庁のほうに強い働きかけをもって、包括的連携協定というのが締結されましたということです。おそらく、ご案内のとおり今年開催されている瀬戸内海での瀬戸内国際芸術祭、前回3年前には延べ100万人以上は来ているわけです。アートでそれだけの人が動く時代になっているわけです。ということは、これから20万件の文化プログラムが日本で行われると、国内外相当な観光振興につながるだろう、こういう期待があるわけです。

もう一つ、これも新潟に関係していますけれども、非常に長いタイトルの組織、2020年東京オリンピック・パラリンピックを活用した地域活性化推進首長連合という組織ができ上がっています。これは新潟県内の三条市の國定市長の呼びかけによって、全国の自治体の首長が、1年前で310、今380くらいと聞いていますが、みんなやろうということで手を挙げて入っているわけです。競技大会は主に東京中心でやるのでしょけれど、主に文化プログラムを中心とした形で地域の活性化、観光振興に大きくつながると期待があるからこれだけの手が挙がっているわけです。設立総会が東京の永田町で開かれたのですが、6月の議会中だったにもかかわらず、100人以上の首長さんが全国から集まって、黒塗りの車がどんどん行き交うという感じで相当物々しいことになっていました。それだけ大きな期待が地域にもあるということです。こんなわけで、東京オリンピックと言っていますが、文化プログラム、全国で大きな地域活性化の期待があるということです。共同通信の記事ですが、多くの自治体がもうすでに文化プログラムを認識して、希望をもっていますという記事がつい最近出ていました。

三つ目の大事な話として、オリンピックというと2020だから、あと4年後かというふうに思われるかもしれませんが、実はこのオリンピックの文化プログラムというものは、2016年の夏から開始されます。2016年はいつかという今年です。今年何があるのかというと、ご案内のとおり、リオデジャネイロで次のオリンピックが開かれます。オリンピックは、開会式があつて競技大会があつて最後閉会式になりますけれど、閉会式の最後の最後に、ハンドオーバーセレモニーという一つの儀式が行われます。

これは何かと言うと、そのときの開催都市の首長から次の開催都市の首長にオリンピックの旗が手渡されるという、そういうセレモニーです。前回だとロンドン市長からリオの市長にオリンピックの旗が渡されました。今年は、リオの市長から誰になるのかわからないですが、東京都知事にオリンピックの旗が渡されるということになります。実はこの旗を受け取った瞬間から、開催国は文化プログラムを開始していくということになるのです。ですから、今年の夏から文化プログラムは日本で始まっていきます。そして丸4年間、足かけ5年間かけて2020年まで文化プログラムをしていく。これは日本全国で起こり、その総件数が20万件ですということです。というわけなの

で、実はあまり準備期間はないというか、いろいろなことがバタバタと動いていく可能性がある。慌てる必要もないのですけども、のんびりはしてられないですねと、こういうタイミングに今我々はいますということです。

最後に少しだけこれが観光にも結びつくという話をしておきたいのですけれども、ロンドンオリンピックのときに、観光キャンペーンでロンドンプラスというものが行われました。これはその名のとおり、ロンドンに来た人がプラス一地域、プラス二地域回ってもらったらいいよねという観光キャンペーンだったのです。これを受けて日本の観光庁も一時期、東京をゲートウェイとして地方へという、東京プラスというようなことを言っていました。

ただし、私は逆転の発想が必要だろうと常々申し上げていて、何の逆転かということをお話しする前に、二つ興味深い需要予測の数値をお話ししたいと思いますけれども、そのうち一つは、首都圏空港の需給バランスの予測です。首都圏空港というのは成田空港と羽田空港。もしかしたら釈迦に説法だったら失礼なのですけれども、結果は水色の矢印で書いてあります。いずれも2020年代に計画処理能力を超過。処理能力を超過することは現実できませんので、平たく言うとキャパシティがいっぱいになりますということです。

興味深いのは、結果ではなく需要予測の前提条件なのです。「2020年の東京オリンピック・パラリンピック開催決定等の需要予測後の状況変化や、政策目標の訪日外国人旅行者数2,000万人などは考慮していない。」非常に味わい深い文章ですね。オリンピックが開催されて人が増える、政策目標で2,000万人掲げていますけれども、さらに言うと、2,000万人ではないですね、2020年4,000万人に上がって、2030年6,000万人になっていますけど。そんな要因は一切考慮していませんということです。何ら考慮していなくても、成り行きでオーバーフローしますという予測がここに出ているわけです。というわけで、当然、羽田も成田もどうやったら拡張できるのかとか、どうやったら深夜飛ばせるのか検討しています。

もう一つ、興味深い需要予測があって、これは東京のホテルの需要予測です。これはもし2,000万人外国人が来た場合、そういうケース想定をしていますが、その場合は東京の宿泊需給は需要超過（-372万人泊）という予測になっています。表現として分かりにくいですが、1年365日ありますから、毎晩1万人以上が泊まれませんという予測です。これは日本政策投資銀行がしています。現実にそういうふうになりつつあるわけです。この二つの需要予測を組み合わせたときにどういうソリューションが考えられるのか、もちろんシンプルに言えば、羽田と成田はもっと拡張し、夜間も飛行機を飛ばし、東京にたくさんホテルを建てるというのも一つのソリューションです。ここで逆転の発想ですよ。別のソリューションもあるのではないかと。

日本はなぜかほぼ各県ごとに空港があります。そしてそのほとんどの空港から国際線が飛んでいます。こんな先進国、実はありません。羽田と成田いっぱいだったらどうぞと。新潟空港に入国してもらえばいいじゃないですか。

そして新潟市に長期間ステイしてもらえばいいですよ。でもその人がもしオリンピックの試合を見たいと思ったら、どうぞ新幹線でも高速バスでも、十分日帰りだってできますよ。こんなに国土が高速鉄道網、高速バス網で緊密にネットワークされている国も世界中にありません。なんらインフラ投資はいらぬわけですね。空いている新潟空港にもっと国際線で入ってもらって、新潟市に長期ステイしてもらって、そしてもしオリンピックの試合をどうしても見たい、どうぞと。バスでも新幹線でも、日帰りでもいいです。もし行きたいんだったら1泊どうぞ東京にと。というわけで、やるべきことは、ロンドンプラスを真似した東京プラスではなくて、プラス東京、という戦略をこのオリンピックに合わせてやるべきじゃないかと。これが本当の地域振興というものではないかというふうに私は考えています。

さて、ただ、ここに一個問題があつて、皆さんも逆の立場で考えてみていただければいいのですけれど、例えばロンドンオリンピックのときに、皆さんはロンドンのオリンピックの試合が見たいと思っていた。だけれどもヒースロー空港はいっぱいですと。ロンドン市内のホテルもいっぱいですと言われて、どこでもいいからどこか地方の空港から入ってくださいと言われた時に、じゃどこへいけばいいのですか。そしてその都市に行ったら、私は一体何が体験できるのですかというふうに疑問に思うと思います。そのときに、文化プログラムというものが大きな役割を果たすのではないのでしょうか。どうぞ新潟に来てくださいと。新潟に1週間でも2週間でもいてください。オリンピックどうぞと、さっき言ったとおり、日帰りでも1泊でもいいですよ。新潟にステイしていただければ、例えばですけど、その期間にアート・ミックス・ジャパンで日本の伝統芸能も十分に楽しんでいただけますよとか、それ以外の食文化もありますよね。さまざまな文化、新潟にずっといるだけで、さまざま楽しめますと。こういうメニューを提供していくことが大きなポイントになっていくのではないか。というわけで、この文化プログラムというものが、単なる文化振興だけで終わるのではない。これが観光振興になり地域活性化にもつながる。それが政府目標にもダイレクトに直結するという、大きな構想の中でぜひ考えていけないかと考えているわけです。若干時間オーバーしましたけど、以上です。

(司 会)

ありがとうございました。それではここからの進行は、太下委員長にお願いいたします。

5 意見交換

(1) 新潟市文化創造都市ビジョンの見直しについて

(資料1、資料2-1、資料2-2、資料3)

(太下委員長)

それでは進行をさせていただきたいと思います。まずご用意されている資

料、事務局のほうからご説明いただきたいと思います。(1)新潟市文化創造都市ビジョンの見直しについて、ご説明をお願いいたします。

(事務局)

それでは私から文化創造都市ビジョンの見直しについてご説明させていただきます。お手元の資料1をご覧ください。

平成24年度に策定しました現ビジョンを見直し、平成29年度からの新たなビジョンを策定するに当たり、今回は見直しの方向性についてご説明をさせていただきます、委員の皆様から新ビジョンに盛り込むべき課題や、新たな視点を中心にご意見をいただきたいと思っております。それでは資料に沿ってご説明させていただきます。

まずはじめ「期間」についてですけれども、こちらは現ビジョンと同様、新ビジョンについても概ね5年間を展望した方向性としてまとめていきます。ただし、社会経済環境の変化、施策の進捗状況などを踏まえ、必要に応じて見直しを行います。

次に「構成」です。現ビジョンは(1)現状と課題、(2)ビジョンの位置付け、(3)基本理念、基本方針、(4)施策体系、(5)重点施策という五つの項目で構成しております。新ビジョンでは新たにこちらに(6)として成果目標・指標、(7)として推進体制という項目を加えまして、ビジョン策定後のPDCAサイクルを確立していきたいと考えております。

次に「現状と課題」です。文化を取り巻く現状と課題としまして、地方創生、2020年東京オリンピック・パラリンピックの開催、国際交流の拡大、情報環境の高度化、災害復興など、現ビジョンの策定時には想定していなかった新たな動きが出ております。さらに新潟市の現状と課題では、現状にあたる(1)取り組み状況、(2)成果、新しいほうの欄ですけれども、「(2)成果」について水と土の芸術祭やマンガ・アニメ、食文化、ラ・フォル・ジュルネ、Noism(ノイズム)といった施策を着実に推進してきた結果、文化庁の長官表彰や日仏交流優良賞など、外部からの評価をいただくことができました。昨年の東アジア文化都市の選定も一昨年の横浜、それから今年の奈良、来年の京都と並ぶ文化都市として新潟市が認められたということだと思っておりますし、この4月からは創造都市ネットワーク日本、略してCCNJと言っており、今、約70都市が加盟している団体なのですが、こちらの代表幹事にも新潟市が就任をしております。さらにその間には、プロジェクションマッピング、ここには光の響演と書いてありますけれども、プロジェクションマッピングですとか、能登委員が取り組んでおられますアート・ミックス・ジャパンといった、新たな文化創造の取り組みも生まれてきております。

一方、「(3)課題」としましては、観光、産業、雇用、福祉、教育、移住、交通等といった他分野との連携あるいは、県外、さらには海外へのPR力の不足、それから専門人材や団体の不足、また大型イベントの中央区への集中、財源の確保といったことが課題としてあげられると考えております。これら

についても新ビジョンの中では触れていくということになります。

その下の「経緯、位置付け」でございます。現ビジョン策定までの経緯はこちらの左の策定に至るまでの経緯に記載してあるとおりでございます。新たなビジョンの策定にあたっては、国や県の指針や計画等と連動させることでさらに連携を強化してまいります。また市及び新潟市芸術文化振興財団との関係では、本市の総合計画でございます「にいがた未来ビジョン」、それを拡充強化する「新潟市まち・ひと・しごと総合戦略」の下位計画として、新しい「文化創造都市ビジョン」を位置付けるとともに、今年度に改定いたします「マンガ・アニメを活かしたまちづくり構想」、それに加えまして新たに策定をいたします「食文化創造都市推進計画」、さらには新潟市芸術文化振興財団のほうで策定を予定しておりますビジョンがあるのですけれども、こちらの上位計画に位置付けるといふことで考えております。

続いてビジョンの内容に入りますけれども、「基本理念」でございます。「基本理念」と、それに基づく「基本方針」については新たなビジョンにおいても継続をしてみたいというふうに考えております。それから「施策の体系」についてです。こちらについてはもう一枚の資料2-1をご覧ください。こちらは現在の文化創造都市ビジョンの施策の体系をまとめたもので、三つの基本方針に沿った形でこのようにまとめております。

続きましてお手元の資料2-2、こちらの表をご覧くださいと思いますが、こちらについては文化創造都市推進に向けまして、主に市としての取り組み状況を今回全庁的に調査をいたしまして、先ほどの施策体系に沿って整理したものがこちらの表になります。本日はあくまでも中間報告ということで皆様にお示しをさせていただきましたけれども、今後は成果目標や指標などを加えましてビジョンの進行管理に活用していきたいと考えております。

それではまた資料1に戻っていただきまして、2枚目をご覧くださいと思います。2枚目はまず「重点施策」についてですけれども、現状課題を踏まえまして、右側の新規設定の欄でございますけれども、点線で囲んであるキーワード、例えば文化財の保存・活用、マンガ・アニメツーリズム、鉄道文化、古町芸妓、アールブリュットといったような言葉が書いてありますけれども、こういったようなキーワードを盛り込みながら、重点的に取り組むべき事項を新たに設定していきたいというふうに考えております。私どもとしましては現段階ではこの新規設定の欄の丸で三つ、白丸で三つ書いてありますけれども、「交流定住人口の拡大」、「文化芸能の継承・活用、芸術活動の推進」、「文化創造都市の推進」、こういったあたりが新しいビジョンの大きな方向性になるのではないかと考えております。

その次に「推進体制」についてです。現在のビジョンについてはこの推進体制について定めているところがございませんが、新しいビジョンにおきましては新規で設定をさせていただくということ考えております。まず「新

新潟市文化創造推進委員会」ですけれども、今現在、本日開催している委員会でございますけれども、こちらにつきましては有識者、文化関係者などから構成し、次期ビジョンの案に対してご意見、ご提言をいただくほか、ビジョンを策定した後も進行管理の役割を担っていただきたいと考えております。

それからアーツカウンシルという言葉がこちらに書いてありますけれども、これにつきましては今年度文化庁の補助事業を活用いたしまして、2020年の東京オリンピック・パラリンピックに向けた文化プログラムを着実に推進するとともに、大会終了後も継続して地域文化の発展を牽引する文化芸術の専門家による組織ということで、これを立ち上げることを予定しております。アーツカウンシルは、直訳いたしますと「芸術評議会」と呼ばれておりますけれども、専門家によりますと、芸術文化に対する助成を基軸としまして、政府・行政組織と一定の距離を保ちながら文化政策の執行を担う専門機関というふうに定義されております。こちらのアーツカウンシルにつきましては議題の3で詳しくご説明させていただきますが、文化創造推進委員会の委員長、太下委員長になるわけですけれども、太下委員長にはこのアーツカウンシルのアドバイザーも兼務していただいて、アーツカウンシルとこちらの委員会との情報共有を図ってまいりたいと考えております。

次にその下の「新潟市文化創造推進本部」については市長を本部長とする市役所内の推進体制でございまして、要は我々ということになりますけれども、新しく作るこのビジョンの策定と推進、それから2020年までの4年間は特に先ほどの東京オリンピック・パラリンピックに向けた文化プログラムに全庁体制で取り組むということで、こちらにも新たに設置をさせていただきました。そのほか市内の文化・芸術等関係団体や国、あるいは県との連携を強化したり先ほど申し上げました創造都市ネットワーク日本、CCNJなどさまざまなネットワークを活用して文化創造都市の取り組みを推進していきたいと考えております。

次に「成果目標・指標」ですが、こちらの現ビジョンでは項目として設定してないのですけれども、新しいビジョンでは、関連する事業について5年後の目指すべき姿と成果、指標を設定するもので、今後、庁内関係課で構成する推進本部のワーキンググループで案の作成に向けて作業を行います。それから「基礎データ」の欄でございまして、こちらは現ビジョンにこちらの2項目、市政世論調査結果と新潟市の文化の現況というものを抜粋で掲載しておりますが、新しいビジョンにおいては、進行管理を行うための庁内調査を行うとともに、新たに市民意識調査を行う予定としております。その調査項目につきましては、お手元の資料3の市民意識調査の設問項目（案）ということでございまして、こちらをご覧くださいと思います。1として基本情報5問ございまして、そのほか2として文化創造都市全般に関する設問、これを5問から7問程度、それから3ということで先ほども説明しましたが同じく今年度改定を予定しております「マンガ・アニメを活かしたまちづく

り構想」に関連した設問として、2問から5問、設問を設定したいと考えております。私からの説明は以上です。

(太下委員長)

ご説明どうもありがとうございました。今ご説明いただいた資料の1から3くらいまでですか、これに関してご質問、それからご意見等があれば、ぜひお願いしたいと思います。だいたい15分くらいですかね。

(迫委員)

これは、書いてあることに対してこういうふうにしたほうがいいんじゃないんですか、というような意見を出すということですか。

(太下委員長)

もちろんそういうのも含めて。はい。

(迫委員)

何でもいいですか。軽くしか読んでいないので、お話を聞いた感じだけではあるのですが、意識調査の設問、資料3ですね、さっきまちあるきをして、まちあるきというかこれに載っているような写真を撮って、文化的なことをしているんだなあと思ったというような自己紹介だったんですけど、2番のところの楽しんでいる文化活動の中に「まちあるき」だったりとか「デザイン」とか「買い物」というような項目を設けることで、そういうことも文化活動ですよというか、新潟市の文化の意味を広げているというのが強みのようなので、そういうのを入れて、これであればいかにも「ザ・文化」という感じがするので、そうじゃないんだよというのを加えるといいんじゃないかなと思いました。

(太下委員長)

表現の工夫は必要かもしれませんが、幅広い文化を楽しんでいるということが選択肢として上がってきたほうがいいと思いますので、ぜひ。

(事務局)

はい、貴重なご意見ありがとうございました。

(太下委員長)

ほかに何かございますでしょうか。

(今井委員)

このアンケートは、毎年郵送アンケートでやっているのですか。

(事務局)

市民意識調査については郵送のアンケートでやっているのですが、今回につきましては新潟市の市政世論調査のアンケートとは別に、今回のビジョンのためのアンケートとして行うもので、調査方法としては郵送アンケートを考えているという状況です。

(今井委員)

若者的立場からすると、郵送って負担なのですけど、SNSでの質問、そういう方法とかもありなんですかね。

(事務局)

そうですね、予算内で対応が可能かどうかということになるかと思うのですが、可能かどうか検討はしてみたいと思います。

(今井委員)

郵送よりは楽になる場合もあります。

(太下委員長)

今度はたぶん高齢者が対応できないので、当面併用になるのですよね。可能であれば、ぜひ検討していただいて。ほかに何かございますでしょうか。

資料1の「新潟市の文化創造ビジョン見直しについて」というのが、今後の検討の設計図みたいなものですから、これについてご意見があるといいのかもしれない。

(迫委員)

資料1の「現状と課題」のところで、更新される課題がたくさんあって大変だなと思うのですが、課題を減らしてもいいのではないかなど。とっ散らかる気がして。したいけれども、これは無理しなくてもいいのではないかなというものがあれば減らすというほうが、示すときにボヤッとしてくると思うのですよね。そこが気にはなりません。

(伊藤委員)

私もそれを感じていて、どこにターゲットを絞るのかというところが、例えば平成29年度から平成33年度までとなると、やはり東京オリンピックの文化プログラムを意識せざるを得ないと思うのですけれども、文化プログラムにターゲットを絞るのか、それとも市民がよりよく生きるための文化という意味に絞るのかというのは全然違う方向ではないかなという気がしているのです。

文化プログラムの方は結構短期的なもので、それから先ほど言われたように、入口としての外国人を狙うということだとすると、やはりそこはかなりイベント的なものを集中してやるという形になるかと思うのです。だから、その部分は結構分けて、ちゃんと分かりやすくしたほうがいいのかなどという気もしたのですけれども。

(事務局)

そうですね。あくまでも今回のビジョンについては、文化プログラムだけではなくて、文化プログラムも含む市民全体、新潟市全体の文化をどうしていくかというビジョンになりますので、文化プログラムについては、また文化プログラムとしてきちんと作るという形になるのかと思っています。

課題が多すぎるというご意見、ごもっともだなと思いました。我々、特に市長から今回言われているのが、やはり文化については我々も今まで説明で申し上げましたが、いくつか外部的な評価もいただいて、それなりの評価をいただいているかと思うのですけれども、あとはやはり実態として経済ですとか、地域の活性化というところに結び付けることを意識してほしいとい

うことを市長からも言われていますので、そういった辺りをビジョンの中に盛り込めればいいなと考えております。

(太下委員長)

文化プログラムについては、先ほどお話ししたとおり、レガシーというキーワードが非常に重要だと思いますので、見た感じイベント的なものが増えてしまうにしても、それが終わったあと、この新潟にどういう効果、影響をもたらすのかということ念頭に組み立てられていくということになりますと、言ってしまうと文化プログラムは手段だと。多分新潟にとっては、どういうふうに活用できるのかという一つの駒のような形で考えていくほうがいいのかなと思っています。

(事務局)

今後の文化創造都市ビジョンの策定についてということで、私も補足的に説明させていただきたいと思うのですが、新しいビジョンに関しては、やはり文化という範囲が非常に広範囲になっているので、やはり課題といいますか項目が多くならざるを得ないのかなという気はしています。そういった部分に関しては、また庁内でそういった検討委員会的なものを設けていますので、それに対しては、今後については例えば文化を子どもの文化、高齢者の部分、障がい者の部分、それからやはり継続的にというのでしょうか、いろいろなカタカナ用語で言うとサステイナブルみたいな言葉もありますし、今回の計画は平成33年度までということになると、オリンピックの後というのでしょうか、翌年にもなっていますからその後を見据えて、例えば文化プログラムというのは一つの手段だと思うのです。新潟の文化がどれだけ今後に向けて継続的にどうなのかと。東京オリンピックの beyond2020 みたいな言葉。その後を見据えてどう考えるのかという視点が大事なのかなと思っています。

いずれにしろ、皆さんの方に今回の説明の中で、じゃあ作ってくださいと言ってお願いするわけではなく、また庁内のいろいろな部署、福祉の部署であるとか経済の部署であるとか、いろいろな観点で素案的なものを出しながら、また次回きちんとした形でお示ししながら組み立ての部分をお願いしたいなと思っていますので、あくまでも文化創造都市ビジョンとしては新潟市のどういう思い、ターゲットはと言うと、市民向けでもあり対外的でもあり、新潟市としての文化創造の基本的な考え方を広く示すものと。抽象的なものになるかもしれないのですが、私個人的にはそういう考え方で整理をしているところです。

(太下委員長)

ほかに何かご意見ご質問等ございますでしょうか。

(村山委員)

村山でございます。資料1の2枚目ですけれども、「新規設定」の「新たに盛り込むべき要素等」のところの3つ項目が立ててあるところの一つ目、「交

流定住人口の拡大」の部分についてですが、もちろん文化ということを手段として交流人口を拡大というものを短期的にも目指すべきところなのかなと思うのですが、定住人口拡大というものは、これからの5年のビジョンの中に入るべきものなのかなのかどうか、少し違和感を持っていた部分なのですが、結果的に定住人口の拡大につながるということは当然目指すべきところなのなのですが、かなり長期的な視点がこの辺は必要になるかと思いましたが、この辺りの新規設定項目について、到達すべき目的と手段というのが混在しているようにも思いましたし、短期的な視点と長期的な視点という部分も混在しているのかなというところで、少し違和感をおぼえる部分があったのですが、一つ目の項目に対する定住人口の拡大のところに関しては、この先のビジョンとして盛り込むということで皆さん違和感はないのかなと、個人的な意見なのですが、

(太下委員長)

この辺りの背景をご説明いただけますか。

(事務局)

ここに「新潟暮らし（U I Jターン）の推進」と書いてありますけれども、今、新潟市の一番大きな課題として定住人口を拡大するというか減らさないという取り組みが非常に大きな課題になっていますので、やはりここに文化プログラムのような短期的な取り組みとともに、文化プログラムにも位置付けられるのかもしれないのですが、例えばラ・フォル・ジュルネですとか、アート・ミックス・ジャパンというイベントが新潟市内でいくつか開催されて、要は文化があふれる街になれば、そういうまちだったら新潟市に住んでもいいかなと思う人が出てくるのではないかなというようにもなっていて、交流人口だけではなくて、定住人口という言葉も我々としては入れさせていただければと考えております。

(太下委員長)

ハードルはすごく高いと思うのですが、新潟市が姉妹都市になっているフランスのナントが、フランスで一番住みたい都市に選ばれているのです。実際、人口減少に対してアートに力を入れているということが大きなインパクトになっているという事例もありますので、成功したらすごいなという感じはしております。

(石田委員)

今の議論に関してですが、今の新規設定のところの具体的な取り組みとして盛り込む要素、キーワードの中に、「マンガ・アニメツーリズム」というのがワンワードで入っていて、これが意味するところがピンとこないのかな。というのは、「がたふえす」というのは新潟市の人たちに向け、新潟県内の人に向けてというふうに言ったほうがいいかもしれませんが、やはり首都圏からさまざまな作品やプロダクションやイベントをもってくるということで、それは誰にとってのツーリズムかというか、こういう書き方をされると、

新潟アニメを目指して新潟市に来ることを目指されているのか、それとも新潟市にいる人たちがアニメ・マンガをさらに深く楽しく多角的にかかわるために何かを誘致するのかというのが、両方全然違うことが一つの言葉にギュッと入ってしまっているのです、何かここは。そのあとに「ポップカルチャー」ともあるのですが、分けて考えられたほうが何を目指そうとしているのか、よく分からないなというところがございます。

今のお話の新潟市で、文化があふれるまちで人が住みたいと思うのか、同時に、外から新潟市に文化を求めて来る人を呼び込もうとしているのか、これは両輪であるべきなのですけれども、それが一気に一つの言葉になってしまったかなという気がするのです、ご説明というか、もう少しかみ砕いたほうがよろしいかなと思います。

(太下委員長)

これは私も気になっていたのですけれども、「マンガ・アニメ」だけ「ツーリズム」が付いていますけれども、ほかでも「ツーリズム」が付いていてもいい要素もあって、要は特にフォーカスして考えていくべき分野の話と、ツーリズムという一つのプログラムの話がここだけくっついてしまっている感じがするのですよね。ここは単に「マンガ・アニメ」としておけばいいのかなという気がしますし、一方で、上の「交流定住人口の拡大」の中に入るのかもしれないけれども、私はぜひ新潟市さんとして広域連携という大きな戦略というか、方向性を出したほうがいいのかと思っています。というのは、例えばアニメについて言うと、「がたふえす」は非常におもしろいフェスなので、東京圏からも十分に誘客できる、まさにツーリズムができますし、さらに言うと、来年2017年は日本アニメーション100周年の節目の年なのです。そうすると、おそらく東京でもすごいイベントがあるし、さらにマンガ家の方は結構地方出身の方が多いので、いろいろな全国の地方でさまざまなイベントが来年行われることが予想されるので、そういうところとどういう連携をしていくのかという話にもなってくると思います。

それ以外に、例えば新潟はご案内のとおりアート・ミックス・ジャパンとか、Noism(ノイズム)みたいなパフォーマンスアーツがすごく盛んですけれども、日本国内で見ていたときに、パフォーマンスアーツが盛んなのは東京と静岡県なのです。静岡県は県立の劇団を持っていますし、例えばさっきお話ししたとおり、首都圏空港はいっぱいということを考えると、静岡県の富士山空港と新潟空港を結んで、パフォーマンスアーツのツアーみたいなものをヨーロッパから誘客できないか、みたいなことだって考えられると思いますし、さらに言うと食文化は新潟もすごく力を入れていますけれども、羽越線の沿線上で山形県鶴岡市は日本で初めてユネスコの食文化創造都市の認定を受けています。それ以外に、この沿線上で言うと村上は独特の鮭の文化がありますし、秋田も非常におもしろい食文化があると。この羽越線上で結んで新潟空港と秋田空港をインアウトにして食文化の一つの流れができな

いかとか、まだほかにもいろいろありますけれども、例えば縄文土器は世界的に見ても非常にユニークな文化であると篠田市長はおっしゃっていますけれども、縄文土器と新潟漆器みたいな、陶器・漆器の文化と、あとは栃木の益子、それから茨城の笠間という二大産地を結んで、茨城空港に抜けていくような新しい流れができないかとか、いろいろいくらでも考えられると思うのです。

いずれも全部新潟市内だけで閉じているのではなくて、広域的な文化の連携というのは大事なような気がするので、ぜひ広域連携みたいな要素も入れていただければと思います。

(事務局)

ありがとうございました。「マンガ・アニメツーリズム」は確かにここだけ「ツーリズム」が付いているのはおかしいかなという感じはしております。マンガ・アニメについては、今のビジョンにももちろん入っていたキーワードではあるので、新しい言葉ということで今回ここに入れた形になっていると思いますけれども、確かに交流人口を呼び込むという点ではマンガ・アニメだけではないので、これについては事務局のほうでまた考えたいと思いますけれども、気持ちとしては、今「がたふえす」という言葉が出ましたけれども、マンガ・アニメに関する取り組みはマンガ・アニメ情報館ですとか、マンガの家を作ってやってきたのですけれども、がたふえすもどんどん規模も拡大できているのですが、そこに外からの人を呼び込むという辺りが、まだ弱いなと我々としては感じていたので、「マンガ・アニメツーリズム」という言葉にして表現してしまったということです。

(能登委員)

先ほどの太下さんの話に非常に共感できて、広域連携の件なのですけれども、非常に新潟は今すごくいいソフトコンテンツが集積している状態です。さまざまな日本国内、さまざまなコンテンツとタグを組んでいくというのは非常に評価して、非常にありだなと。それに追加すると、世界中でいかに新潟が有名になるか。それが一つポイントできれば、勝手に日本国内では有名になってしまうと思っておりまして、そういった視点、何かそういうものができれば、すごく分かりやすいのかなと思います。それが何がどのコンテンツかということではないのですけれども、世界規模で発信できるような施策、または方向、ビジョンを持つておくということは非常に重要だと思っています。

(太下委員長)

そうですね。せっかくオリンピックでもあるわけですし、世界に発信していきたいですね。

(迫委員)

この話の中でも、文化が何を指すかというのがぼやけているので、議論が非常にしにくくて、創造とは何か、活性化とは何かというところが難しい部

分で、僕たち上古町商店街ではよく取材で「活性化とは」みたいな話をされるのですけれども、いわゆる活性化だと、人が増えることだったりお金になるという話だと思えるのですけれども、僕が思う活性化は、中学生に教えてもらったのですけれども、お店の人がニコニコして自分のまちが好きだというのを簡単に言えるところが活性化している状態かなと思っていて、自己肯定ができるというか、自己肯定できる仕組みを作られたらいいなと思うので、自己肯定をするためには、世界に評価されることであったり、自分たちってすごいなということなので、ここに書いてある文化とは何かというところをより具体化、ある程度誰にでも分かるような、ここで言う文化は何か、どういう文化かというのを具体的にして、さらに活性化ということはどういうことなのかを明確になると、市民にも理解してもらいやすかったり、目指しやすいのかなと思うのと、目標を掲げるとすれば、世界で唯一とか、世界一になるものを作るとか、より具体的なものを立てて、そういうものがあると言いやすいというか、「何とかの新潟市」と言えるので、それがあると自慢しやすいなという気がします。

(太下委員長)

今の迫さんのご意見は、確かに、成果目標、指標の立て方とかなりリンクしますよね。この立て方によって活性化の内容が規定されることになると思います。行政評価の一環でこういう項目が設けられているのだと思いますけれども、新潟市の場合にはたぶん大丈夫だと思いますが、くれぐれもここで間違わないようにしてほしいのは、よくあるのは、文化振興計画のいわゆるキー・パフォーマンス・インディケーターと言いますよね、成果指標というときに、来館者数とかイベントへの来場者数を設けるケースがままあって、それをやってしまうと本末転倒になってしまうというか、本当は手段のはずなのですけれども、結局集客が目的になってしまうのです。仮に美術館の目標が本当に来館者数なのだとする、それは今やっているような展覧会を全部やめて、1年中ドラえもん展をやっていたらいいのです。そのほうが絶対に人が集まるのですから。でも、そうだとするとちょっと違うよなという感じがするわけで、それは目標の立て方が間違っているということなのです。

そういう間違った目標を立てないように、ぜひ今言ったように、世界一なものを5つみたいな、非常にシンプルで分かりやすいのですけれども、何か分かりやすく、実際に意味のあるような目標を立てていただくと、活性化の意味が明らかになるのかなという気がしました。

(田中委員)

今まで伺ってきたのですけれども、やはりビジョン見直しということは何が一番違うのかというと、やっぱりオリンピックが決まったことによるいろいろな変化が大きかったのではないかと思うのです。市民は「オリンピックのために」と題を付けると、何だ、自分たちのためではなくてオリンピックのためにやるのか、みたいなことを言って反対する方がいらっしやるので、

その表現はよくよく考えなければならないと思いますけれども、やはり先ほどおっしゃった資料1の2枚目の「交流定住人口の拡大」というのは掲げなくても、結果、ついてくる。東京オリンピック・パラリンピック開催に向けて集中してやることによってついてくるものとして、目標ではないかなとも感じますので、やはりオリンピックに向けて集中したほうがいいということをおもいました。

(太下委員長)

ありがとうございます。当初の想定のご議論の時間にきておりますけれども、まだご発言のない委員の方で、このビジョン見直しについてご意見のある方がいたら、ぜひ伺いしたいのですけれども。

(大谷委員)

資料1の2ページ目、先ほどからお話しされています、取り組みとして具体的に盛り込む要素という中で、先ほどのマンガ・アニメツーリズム、実は我々の業界からしますと、ツーリズムという名前を付けますと、すべてビジネスになるという状態になっています。昔からよく言われていますのは、農業系の新潟ですとグリーンツーリズムという名前がありました。昨今ある名前では、インフラツーリズムという名前があります。俗に言うインフラですから大きい建物を見学しに行きましょうと。昔ですとそれは視察という名目で、難しい内容でツーリズムという名前が付かない状態でありましたけれども、現状では、インフラツーリズムという中で、我々もビジネスとして一般の方々をお連れしています。例えば大きいダムの裏側ですとか、大きいビルの中の排水の設備ですとか。ですから、決してマンガ・アニメツーリズムだけではなくて、ツーリズムという名前を付けますと、我々の業界としてはすべてのビジネスに影響してくるというお話とともに、ここに食の文化関係での取り組みがあります。

先般、農家レストラン、新潟市が農業特区を取られた中で、非常にマスコミに取り上げられて、どういう状態なのかと。我々の業界として、どういう取り組みができるのかという内容に興味を持ちながら、3軒あるうちの1軒のレストランを、先般、見せていただきました。今後、おそらくブラッシュアップをされるほうがいいのだろうと。ちょっとどうなのかな、農家のレストランないしは農業県として、やはり全国に打って出るための農業特区としてのレストランを、やはり今後ブラッシュアップしていくことによって、我々はその新しいツーリズムという言葉をつけて、ビジネスとして展開をしていくことが可能なのかという部分を非常に考えております。

私は新潟に転勤してきまして、最初に買った本が『新潟あるある』という本でした。新潟ってどういうところなのだと。そもそもがやはり気候からくるもので、新潟の出身のマンガ家の方は非常に多いと聞きます。天候が悪い中で、どうしても家の中でできるということをしながらか、マンガ家の方が増えたという一文を私は目にしました。やはり新潟の独自である気候・風土と

いったものが文化に反映できると、よりよいものであり、世界に発信する最も分かりやすい方法なのだろうと。

今後、先ほど委員長がおっしゃられていた、さまざまな空港でのインバウンドという問題があります。世界各国からさまざまな人を呼ぶのは、これは非常に難しい問題なのですね。いろいろな空港があります。この近辺ですと仙台の空港ですとか、小松空港、そういう空港とさまざま競争をしていかなければいけません。我々はそういった中で新潟にどうやって観光客を呼び入れるのかという部分ですと、やはり新潟をよく知った中での特色を出すべきであろうと。それは一つには農業であるとか、私が考える農家のレストランがぜひ成功していただきたいのと、二次的な収入が入ることによって、やはり若い世代の方が農家に興味を持っていただいて、若い方と高齢者の方々が交流を図っていただき、ゆくゆくは首都圏からも人口が増えてきたらいいのだろうと、そういった形の中身がこのビジョンにすべて盛り込まれているのであろうと私は判断をさせていただきつつ、それを具体的にどうするかというのは、非常にこれから難しい問題ではあると思うのですが、ポイントとなるべきはやはり新潟らしさというのでしょうか、新潟のいいところを全面に打ち出すことによって新潟市の皆さんにもご納得をいただきつつ、ないしはそれが諸外国の人間の方々にもご納得いただける内容になれば、非常にいいのだろうと。

実は私は生まれも育ちも群馬県で小さい頃から育ちましたけれども、この魅力はやはり海があって、まちなかに川があって、先般、市の美術館等を拝見しましたときに、非常にきれいな景色ですね、これからの時期。やはりそういったものを小さい、幼い方々に理解をしていただいて、大きく育っていただけたらいいなど。そんな形でお話をお聞きしていましたけれども、やはり新潟らしさというのでしょうか、それをぜひこのビジョンの中に入れていただけたら、もっとよりよいものになるのではないかなという形で考えています。

(太下委員長)

ありがとうございました。角地さん、お願いします。

(角地委員)

先ほどの活性化の状態であるとか、具体的なビジョンであるとかということについて、自分の中で思っているビジョンについてお話しさせてもらえたらと思うのですが、この間のゴールデンウィークに宮城県のほうに行ったときに、マルカンというデパートに寄ったのですが、ジャスコをすごく昔の形にして小さくしたような、そういう総合デパートみたいなところだったのですが、そこが潰れるということで行ったのですけれども、一番上に大衆食堂がありまして、300席くらいの大衆食堂なのです。昭和モダンギリギリの建物の大衆食堂だったのですけれども、そこが潰れると言って地元の友だちが行こうよと言って、一緒に行ったのです。

そこに何があるかと言いますと、長いソフトクリームがあって、それは箸で食べるソフトクリームなのです。それがその人の自慢、まちの自慢で、それを食べに行こうよと言われて行ったらものすごい行列ができていて、みんなそれを、そのまちの人が食べに来ていたのです。なんでそんなことが起きているのかなと思うと、やっぱり長いソフトクリームは、そのまちの人の「俺のソフトクリーム」になっていたのではないかなと思い、ソフトクリームというのは、どこでも作れるものだなと思ったのです。だけど、このアイデアというか、それを箸で食べるというアイデアで、それがまちの自慢になり得るのだなと思ったことと、そういうちょっとした工夫で自慢できるものができるということと、やっぱり文化というのは広くビジョンを作る上で、どうしても大きな言葉になってしまうと思うのですけれども、自慢できるものというのは、実は結構偏ったものが多いのではないかなという気がしていて、やっぱりビジョンの中に大きな言葉も必要だとは思いますが、もう少し小さくて偏ったものというのが逆に、その人のまちの自慢になり得るのではないかなと思ったということです。

(太下委員長)

ありがとうございました。先ほど、田中委員からオリンピックのためにと言うと反発する市民も出てくるのではないかというお話がありましたけれども、たぶん主語は「自分」とか「自分のまち」なのでしょうね。オリンピックを手段として使えばいいのだろうなと思うのです、せっかく来るのだから。そのために、迫さんもおっしゃっていましたが、シビックプライドという言葉もありますけれども、本当に誇りに思えるような、自慢できるようなまちをこのビジョンを通じて作っていければと思います。

オブザーバーの柴田さん、最後にまとめてご意見いただくような形でよろしいですか。次の議題がもう一つ重たい議題がありますので、すみません。

それでは、事務局のほうで次のご説明をいただいて、それをまたディスカッションしたいのですが。

(2) 新潟版文化プログラムについて (資料4、資料5)

(3) 新潟版アーツカウンシルについて (資料6)

(事務局)

それでは、文化創造推進課の塚原が若干説明させていただきます。資料は4番、5番と6番、それからお手元にパワーポイントを打ち出した文化庁の資料があると思いますが、それを使って説明させていただきます。

まず、文化政策課と文化創造推進課二つあるということで、私どもの課が今年の4月に立ち上げられましたものですから、私どもの取り組み事業を簡単に申し上げますと、オリンピック文化プログラムの計画と推進、それからそれを推進するための新しい外部機関でアーツカウンシルの設立、それから昨年開催しました東アジア文化都市としての継続した文化交流、それから水

と土の文化創造の推進、そして創造都市ネットワークについての幹事都市としての役割といったものが大きな事業となっております。

それでは、まず新潟版の文化プログラムの推進に向けた基本方針の考え方の案を説明させていただきます。資料4をご覧くださいと思います。この資料は上から文化庁、中ほどにピンクで新潟市、一番下の緑が新潟版文化プログラムの推進に向けた基本方針という3段の表になっています。

まず、我々新潟市が文化プログラムをどのように推進していこうかという基本的なところを考えるにあたって、まず国が目指している方向性を確認しようといったところで、一番上の四角囲みになっておりますけれども、文化庁が掲げております文化力プロジェクトのコンセプトが3項目あります。1、2、3と分けてありますけれども、まず1番として「日本の文化力を高め、国民生活の質を向上する」ということ。これは下に具体的なことが書いてありますけれども、「日本の多様な文化芸術を国民が再発見し、維持、継承、編集、発展させる」。これは、いわゆる先ほどから、話題になっているアイデンティティを見直す、シビックプライドを醸成するということが新潟市に当てはまるのではないかということで、ピンク色の矢印に右斜め下に降りていきますけれども、そこに新潟市の文化創造都市ビジョンの現行のビジョンの基本方針、これも3つありますけれども、「新潟らしさを深め、広げる」という、「新潟文化の個性と多様性の伸長」に匹敵する中身ですよという表になっております。

文化庁の二つ目のコンセプトですけれども、「文化芸術を資源として、イノベーションを創出し、社会的・経済的課題を解決するとともに、文化GDPを増大する」ということですが、地方創生につなげていこうと。文化プログラムの推進を通じて地方創生を推進しよう、それから今後を担う人材を育成・確保していくこと、それから社会的・経済的な課題の解決につながるようなモデルを提示していこうという中身かと思います。それが新潟市の創造都市ビジョンで言うと、右斜め下に降りていきますけれども、「文化を活かした創造都市の実現～文化を活力に～」ということで、現行の我々のビジョンにおいても同様の中身が記載されていると。

それから、文化庁の3番目でございます「文化芸術により世界の人々との交流を進め、世界平和に貢献する」というものが3つ目になります。ミスプリがございまして訂正をお願いしたいのですが、ポチの一つ目「文化芸術の意からにより」と書いてあるものを「力により」と、「意から」を「力」に変えていただきたいと思います。「力により東日本大震災からの復興を世界に力強く発信する。」、それから世界との文化芸術の交流などを通じまして、多様な価値観の相互理解を推進していこうといったものが3つ目のコンセプトになります。これは左下のほうに降りまして、「新潟文化の個性と多様性の伸長」に当てはまってくるでしょうということで、この文化庁の国のコンセプト、それから新潟市の文化創造都市ビジョン基本方針に則りまして、緑色

のところに文化プログラム推進に向けた基本方針として3つ案を考えてみました。

一つは、「文化芸術にあらゆる人々が参加できる機会の提供」ということで、子ども、高齢者、障がい者、外国人など、すべての人が参加できる機会を提供していく、そして多様な価値観の相互理解を進めていきたいと思いますというところが一つ目でございます。二つ目は、「世界に向けた新潟らしさの魅力発信」ということで、新潟らしい独特の文化というものを世界に向けて広くアピールしながら交流人口の拡大に努めていこうというのが二つ目の方針です。三つ目といたしまして、「さまざまな分野との連携による産業・雇用創出」ということで、文化を資源として、観光や教育、福祉などといったところと連携を取りながら、新たな価値を生み出して、地域経済の活性化、それから地域の課題解決などにもつなげ、都市の活性化につなげていこうということを基本目標にして3つ掲げさせていただきました。これについて、また後ほどご意見をいただきたいと思いますと思っております。

続きまして、資料5をご覧くださいと思います。資料5は、文化庁の参考資料（「文化プログラムの実施に向けた文化庁の取組について（文化庁）」）として、四角の枠の中に右下にページ番号が振ってありますけれども、こちらの7ページを併せてご覧いただきたいと思います。ピラミッド状の図面が付いておりますけれども、それも一緒にご覧いただきながら聞いていただきたいと思います。

この表の資料5の見方といたしますと、一番上の3つについては今ほど説明させていただきました基本方針が3つでございます。大きな表の真ん中部分に「文化庁区分」、「国主導」、「国タイアップ」、「民間・自治体」と書いてある欄がございます。これが参考資料7ページのピラミッド上の三角の部分の中身になります。「文化庁の文化プログラムの取組について」ということで、3つの枠組みに基づきまして、文化プロジェクトを推進していこうと。参考資料でいうところの2枚目の裏ページ、右下のほうに7という数字が書いてあります。上の欄が6になっておりますけれども、この三角のピラミッドです。一番上の三角の頂点が「国が主導するプロジェクト」ということで書いてあります。

「平成28年度の取組」は右に四角囲みで書いてありますけれども、国が主催するプロジェクト、真ん中が「国が地方公共団体、民間とタイアップした取組」ということで、具体例が右側に書いてありますけれども、例えば水と土の芸術祭などはここに入る中身になってくるでしょうと。それから、一番下が民間、地方公共団体主体的に取り組むを行う事業のことで、これについては地域のお祭りも含めて、小さなものまで、すべて拾い上げていこうという中身になっておりますが、それが資料5の中ほどの列のほうに国主導で行うもの、国タイアップ、民間・自治体というところに丸付けをしてあるということで、例えば、平成28年度国主導で行うものということで、1行目に書

いてあります「メディア芸術祭新潟展」については、国が主導する事業ですけれども、今年度は新潟市のほうで開催することが決定しております。次の行になります「BeSeTo（ベセト）演劇祭」、これも10月に新潟で開催をいたします。国から補助金をいただきながら、Noism（ノイズム）の金森穰さんがアーティスティックディレクターになりまして、日中韓の演劇祭を新潟で開催するというものが決まっているということです。

そういう視点で、この表の一番左側の列が「区分」と書いてありますけれども、「国際文化交流イベント」、「独自文化（新潟らしさ）のイベント」、その下が「伝統文化のイベント」、「その他」ということで、ここまでが太い四角囲みにしてあります。ここに挙げているイベントの名称というのは、先ほど中野課長から説明申し上げました、庁内の文化資源調査中間報告の一覧表からピックアップしたものでございまして、赤字で書いてありますものが報告に挙がってこなかったけれども、これは該当しそうではないかという、気付いたものだけを取り急ぎ羅列したものになっているということで、この文化資源については「新潟版文化プログラムの想定事業調査中間報告」ということでタイトルを付けさせていただいております。

この表の右側、緑とか黄色とか薄い緑とか白抜きとか、この部分については平成28年度からオリンピックがあります平成32年度に至るまで実施することが確定している想定されるものについては、深い緑、それから平成28年度の欄の薄い緑については、10月に至るまでに終わってしまうもの、それから白く抜いてあるものは、その年には開催を予定していないもの、それから黄色い色つきで網掛けをしてありますのが、まだ確定はしておりませんが実施が考えられるものということで、例えば「国際ダンスフェスティバル」ですとか、「水と土の芸術祭」辺りは黄色になっています。「BeSeTo演劇祭」についても3年に1回、日本で開催することになっておりますので3年後についても可能性があるということで黄色の印を付けております。

中ほどに白抜きしてあります「水と土の文化創造都市 市民プロジェクト・こどもプロジェクト」については、2018年だけ白抜きになっておりますのは、これは水と土の芸術祭と連動しておりまして、芸術祭を開催する年には芸術祭の中で、こどもプロジェクト、市民プロジェクトを実施しておりますし、芸術祭と芸術祭の間の2年間は新潟市が直接行っているということで、そういう関係性の中でこういう表記になっております。

国際交流文化イベントの範疇に、とりあえずピックアップした事業については、例えば海外のアーティストですとか劇団ですとか演奏家ですとか、そういった方々がイベントに参加されるようなものについてピックアップさせていただいておりますけれども、例えば伝統文化のイベントに入っています、1行目の「アート・ミックス・ジャパン」などにつきましては、これから海外に進出されて海外でも公演されるということですので、そもそも事業区分が、とりあえず案で作ってありますけれども、こういう区分けでいいのか、

それともこれで良しとしたときにでも、この事業についてはこちらではないのかといったことも含めまして、皆様からご意見をいただければと思っています。

それから、最後になりますけれども、資料6をご覧ください。オリンピックの文化プログラムを推進していく上で一部重要になるのがアーツカウンシルという組織の存在が非常に大切になってくるということです。文化庁のほうではロンドンオリンピックの成功事例に基づいて、今まで日本国内にはアーツカウンシルというものは、日本版アーツカウンシル、それから東京都、横浜市、大阪でも数年前から始まっていますし、沖縄ですとか一部の都市で試行的に取り組みはありますけれども、文化庁はこのオリンピックの文化プログラムを通じて、文化芸術立国を実現するという最大の目標を掲げているわけですが、それを推進にするにあたって、国内の文化政策推進する上での最大の弱点として、行政側が文化政策を司ると、どうしても人事異動によっていろいろなノウハウが分断されてしてしまうという状態がありましたけれども、それを解消していこうという目的もありまして、オリンピック文化プログラムを積極的に推進する都市では補助金を交付いただきながら地域版アーツカウンシルを設立していこうという動きがありました。これに新潟市も手を挙げさせていただきまして、最初の年も5自治体の一つに選んでいただいたわけですが、この新潟版アーツカウンシルというものを我々は新潟市芸術文化振興財団の中に設置をして、オリンピック終了後も引き続き市民の文化振興に、行政と一定の距離感を持ちながら、車の両輪として施策を推進していくパートナーとして、アーツカウンシルを残していきたいということで、今、設立に向けて準備を進めているところでございます。

アーツカウンシルの機能といたしましては、①から④まで書いてございますけれども、市民文化活動に対する助成金の審査・支給と活動支援ということで、これまでの市民文化活動の支援というと、どうしてもお金だけの協力ということが多かったと思うのですけれども、アーツカウンシルの役割としては括弧書きで「ハンズオン」と書いてありますけれども、市民に寄り添う形で事業の企画相談から成果の評価、それから次へ向けての改善点と検討ですとかといったものも含めて、全体的に市民活動を支援して、中身をより高めながら4年後のオリンピック本番までに市民の文化活動自体もレベルアップしていこうという支援体制を作りあげようとしています。

それから、②の「調査・研究」につきましては、これもミスプリがありまして訂正をお願いしたいのですけれども、「本紙」と「紙」となっているのですけれども、市役所の「市」に変えていただきたいと思います。本市の文化政策に関するシンクタンク機能といたしまして、さまざまな文化活動助成制度、市の施策等々総合的に見ながら、これからの文化政策について総合的に市に対しても④番に書いてある「企画・立案機能」を使って提言をいただくような中身にしていきたいと思っています。③番「情報発信機能」として、

情報の蓄積と支援事業等の一体的な情報発信をしていこうということです。

体制といたしましては、プログラムディレクター、PDと言いますけれども、1人。プログラムオフィサー（PO）として5名、それから事務局、臨時職員、それから市の職員の我々も兼務2名を想定しております。この体制を最終的には目指しておりますが、平成28年度、今年度につきましては、PD1名、PO2名、あとは臨時職員、市の兼務、それからアドバイザーを太下委員長にお願いしたいと思っておりますが、この体制でいきたいと。9月には設立をしたいと思っております。

人選については、プログラムディレクターというのはアーツカウンシルの親分になりますけれども、この方を先に選考させていただいて、プログラムディレクターとともにプログラムオフィサーにはどういった方がいいかという戦略も含めまして相談をしながら、いい人を選んでいきたいと思っております。

スケジュールといたしましては、4月22日に市長の定例会見ですでに補助事業採択の発表をさせていただいております。文化創造推進本部を5月2日に立ち上げ、同17日には市議会議員全員に対しまして、市長から、全員協議会という場で、補助事業採択の報告もさせていただいております。6月議会で補正予算を要求いたしまして、文化庁の補助金は2分の1ということでございますので、残り半分を補正予算要求をさせていただきまして、その補正議案の議決後、すぐにPD、POの人選公募をさせていただきたいと思っております。その上で9月に立ち上げて、10月上旬には活動に入れるように今、準備を進めているところでございます。

（太下委員長）

ご説明どうもありがとうございました。前半の私の運営がまずかったせいで、当初予定された時間をもう過ぎてしまっているのですけれども、若干時間を延長させていただいて議論等をできればと思っております。

前半、ご意見をお伺いできなかったオブザーバーの柴田さんに、コメントがあればぜひお伺いしたいと思います。よろしく願いいたします。

（オブザーバー）

実は、県のほうも、前半の話ですけれども、文化プランというものがあまして、今年度で終了なので、今年度中に新しいものを作らなければいけないという状況です。先ほどの話を聞いていて、いつもは県ですと新潟県は大きいのでやっぱり全体のバランスを取りながらいろいろなことをやっていかなければいけないというのは、いつもあるのですけれども、一方で、そうしてしまうと総花的なものになって、またよく分からないというか、インパクトのないようなものになりがちだなというのをいつも感じていまして、新潟市でさえ、市町村レベルだと割とその部分は特色は出しやすいのかなというのは県に比べれば感じるのですけれども、それでもそういうご苦労はあるのかなと、意見ではなくて感想なのですけれども、そういうのを感じて、自分たちのプランをやるときも大変かなと思えました。以上です。

(太下委員長)

ちなみに、後半の説明のほうの文化プログラムやアーツカウンシルについて柴田さんから何かございますか。

(オブザーバー)

こちらのほうも、新潟市は今、アーツカウンシルの話で先行しているような状況なので、我々のほうも新潟市と歩調を合わせながら、連携しながらやっていかなければいけないのかなと思っているところです。

(太下委員長)

ぜひ連携した形ができれば、より力が出ると思いますので、よろしく願いいたします。

ほかの皆さんのほうから何かご質問ご意見ございますでしょうか。前半よりも若干難しい内容かなというか、ご説明があったかもしれませんが。

(迫委員)

情報発信が足りないというか、素材はしっかりあるのに伝わっていないというのが一番の問題かと感じたので、アーツカウンシルについても情報発信ができるような、PR担当を非常勤で入れるとか、文化創造都市ビジョンにも情報発信という要素を加えたほうがいいのかと思いました。

さらに、情報発信のところにデザインという要素をくっつけたほうがより分かりやすかったり、伝わりやすいと思うので、今回のアーツカウンシルのほうも情報発信を入れてデザインという要素を加えるのがいいのかというのを感じました。

(太下委員長)

最近、インフォグラフィックという言葉もありますので、情報発信にもデザインの要素も必要かと思えますし、もしかするとデザインはもっと広いかもしれませんがね、活動全般にかかるかもしれませんが、その辺も留意していただいて、今後も体制づくりを考えていただければと思います。

(事務局)

ありがとうございます。

(今井委員)

今、ビジョンを制定している最中で、決まって、市民の方に動いていってもらうときに、これはあくまでも行政サイドがこういうことをしていますという取り組みが分かりやすくなっているの、逆で市民は普段、よく私も言っているのですけれども、周りに言っても新潟は何もないという人がまだまだたくさんいる中で、実はさっき言ったように、意外とやっているのを分かっていないだけなので、こういうことをやっている私たちは新潟市で生まれた文化人なのだよというのを分かりやすく、小さい頃から刷り込みで分かるような広報の仕方、刷り込みって一番いいなと思っているのですけれども、小さい頃から身近にそういうものを分かりやすく感じられるような同じよう

な市民側が見るビジョンも併せて作られたら、発信するときにしやすいかなと思ったので、作っていただけるといいなというか、作りたいと思いました。

(太下委員長)

ぜひ、そんな要素も今後考えていただければと思います。何かありますか。

(事務局)

子どもの部分で言うと、すべてのお子さんたちではないのですけれども、水と土の芸術祭の中で、今井委員もご存じかとは思いますが、「こどもプロジェクト」というところで、本当にすごく文化に親しみながら自分で考えて、創造性をもってという取り組みもしているので、こういったようなものをどんどん広げていくと、意識の高い子どもたちというか、上から目線なのですけれども、そういうふうになっていったらいいなと思いますし、そういうことも念頭に進めたいと思いますが、ありがとうございます。

(今井委員)

ありがとうございます。たまたま昨日、先ほども火焰型土器の話が出たのですけれども、十日町市の笹山縄文遺跡でイベントをやってきて、勝手に市外の人から見ると、縄文って何だ？とか火焰型土器って何だ？という感じだったので、縄文服というのを手作りで着させられて、やっぱり端から見たら変なイベントなのですよ。でも、住民の人たちがものすごい温度感でやっている、子どもたちから大人までというのが、やっぱり市外の間からするとすごく楽しいなと純粋に思えたきっかけだったので、子どもたちの、あの純粋に地元が大好きなのだというパワーって強いなと感じたので、つなげさせていただきました。

(事務局)

ありがとうございます。

(太下委員長)

縄文は大事ですよ。世界的に見てもあんなに1万年も長い間、定常的な社会を営んでいた社会って世界中にないみたいですので、もっと世界に発信してもいいと思いますけれどもね。ほかに何かありますか。

(角地委員)

資料4の文化プログラムの基本方針の中に、項目2のほうで「文化芸術資源を活用して、諸課題の改善や解決に資する新たなモデルを提示する」という項目があると思うのですが、それと今、現状の資料5にある、これまでやってきた文化プログラムを見比べると、課題に対して何かアプローチするプログラムというのは少ないかなという印象があります。新潟の持っている魅力をさらにPRするようなイベントというのはたくさんあるのかなと思うのですが、新潟が持っている独自の課題に対する何か文化プログラムというのがあると、もう少し特色のあるプログラムになるのかなと思います。

例えば、自分の障がい部門について言うと、新潟では障がい者の就労率と

というのが実は全国的に見て 40 パーセント台で非常に悪いのですが、そこを逆手にとって、そこにアプローチするような活動をしていて、障がい者アートのリースをこの 7 月から始めるのですが、障がいのある人が描いた絵を企業や公に貸し出しをして、賃金向上につなげていくという点と、それがきっかけになって障がいのある人と接する機会になるというところが大きくて、それをきっかけに企業とまずは絵から始まったのが、どういう人が描いているのかとか、それが雇用自体につながるのではないかなと思っていまして、そういう一連の物語のある文化プログラムというのが特色のあるものになっていたり、レガシーになるのかなという気がしております。

(太下委員長)

早速、市長室にその絵のリースを。

(伊藤委員)

先ほどから PR の話だとか、それから新潟ならではの課題に通じるような文化という話があったのですけれども、これはアーツカウンシルのことにも通じるのですけれども、やっぱりどんな文化に対して助成をしていくのかということにもなってくるのだと思うのです。そうすると、やっぱりかなり多岐にわたっていて、新潟市としてはこういう色を打ち出したい、こういう文化の香りを売っていききたいというものがはっきりあって、それに基づいたものを重点的にやっていくという方向性が一つ大枠としてあったほうが、対外的にもやりやすいのではないかなと。それはすごく思ったのです。

先ほど、新潟らしさというのは何なのかということも思ったときに、新潟って昔から港町で 150 年ということもあって、昔から新しいものを結構積極的に入れてきた文化ではないかなと思うのです。だから、先ほど田中委員もおっしゃっていたのですけれども、古いものということ勝負しようとする、なかなかそれは本当に特色として全国いろいろな遺産的なものがある中で勝負できないと。だけど、そういうものをいろいろなものを融合できる才能というのは結構新潟にはあるのかなと思って、例えばそれは障がい者と健常者という新しい視点もあるでしょうし、あとは海外と日本文化、古きよき日本文化との融合というのもあるでしょうし、とにかく大枠での大きなスローガンがあった上での方向性を打ち出していったほうがいいのかと。

例えば、伝統文化のお祭りみたいなものは、その土地その土地でずっと根付いているものですし、ある意味、民間の力でできる場所はあると思うのです。でも将来的に向かって、新潟はこうしていこうというのは、やっぱり大枠で市として方向性をバーンと打ち出していったほうが何となくいいのかなという気がしているのですけれども。

(太下委員長)

ありがとうございます。ほかに何かご意見ございますでしょうか。

(村山委員)

今の伊藤委員のお話にも通ずることかと思うのですが、私もいろいろな文

化プログラムを新潟ではいろいろな地域で行われているというので、そういうところは大変盛んなのはいいのですけれども、どこに落ちを作るというか、落とすところを作るのか。こういうのも、ああいうのもあって、この素敵な部分もあって、こんなイベントもある。で、それで新潟ってどうなの？という部分が、なかなか曖昧模糊としていて見えづらい部分ではないかなと思うので、どういうふうに見られたいか、新潟をどういうふうに思っほしいのかという部分を皆さんと共有できたらいいのかなと常々思っているところでした。よろしくお願いします。

(太下委員長)

ありがとうございます。

(迫委員)

僕も同感ですが、とは言っても地方都市なので、あれこれある良さというか、いろいろなことがあることで満足度が高まるという部分もあるので、外と中が混ざったプログラムになっているので、外へ向けてだと特化したものがあったほうがいいし、中向けだと便利なものがあるというか、いろいろなものが肯定されているというものがいいと思うので、内と外というのを分かりやすくやっているほうが説明がしやすくいいのかなという気がします。

それから、水と土の芸術祭に僕たちもかかわらせてもらっていて、市民プロジェクトって非常にいいなと思っていて、そういうところは助成金が出ますけれども、助成金がなければやめていたようなことだったり、見直さなかったようなことに対して、今年は 90 パーセントか 80 パーセントに減ったのですけれども、かなりのパーセンテージでの補助があることで、行政の方が力を貸さなくても勝手にやってくれて長く続く可能性があるという仕組みは非常にいいなと思うので、それを外向きに使えるものではないかもしれないのですけれども、何かそういうものは残したほうがいいのかなという気はします。

(太下委員長)

市民プロジェクトに関わって参加している市民は結構多いですね。そのこと自体は外に対して PR できる要素だと思いますし、そういうものを PR していくと、さっきの視察事業の話になりますけれども、何とかツーリズムみたいな感じにまた変わっていくような気がしますけれどもね。

(事務局)

ありがとうございます。市民プロジェクトのお話が出ましたので、前回の昨年の芸術祭は 109 点の市民プロジェクトがありまして、これについては水と土をテーマにして文化事業という方向性は付けているようでも、水と土ということを広大解釈するといろいろなことができるという意味で、市民の方々が多様な自己表現ができる手段として非常に活用いただいています。質も年々上がってきているというのがあって、ほかの都市の芸術祭がある中で、新潟の最大の特徴は市民プロジェクトがものすごい勢いでやってい

るといった評価もいただけるようになってきました。

先ほど角地委員のほうから課題解決に向けた文化的な取り組みが弱いというお話もいただいたのですけれども、芸術祭を通じて市民が自分たちの地域をよくするために文化的な取り組みをして課題解決につなげていこうという動きも、ようやく出てきているところですので、こういった動きを大切にしていきたいなということと、迫委員からも対外的に見せ方としては新潟市の目指す方向を明確にした上で戦略を立てていくという必要もあるのかなということでしたけれども、その方向性をどこに舵を取っていくかというのは非常にいろいろな方向性がある中で、非常に難しい、悩ましい課題だなと正直思っているところです。

(太下委員長)

行政の立場で「これだ」というのはなかなか言いづらい。言うといろいろなハレーションが起こるのでしょうけれども、助成金を出す、またはパートナーを組む団体といういろいろなセクションの中で、徐々にそういうものは明確になっていくといいかもしれませんね。

ほかに何かご意見ございますでしょうか。だいぶ時間も過ぎており、次のご予定もある方もいらっしゃるかもしれませんが、だいたいよろしいですか。今言っておかないと寝付きが悪くなるような方はいらっしゃいませんか。大丈夫ですか。

それでは、今までいただいたご意見等を踏まえて、このビジョンを事務局のほうでお作りいただくという形にしていきたいと思います。

それでは、進行を事務局にお返ししたいと思います。

6 その他

(司 会)

ありがとうございました。

それでは「その他」ということで、委員の皆様から事務連絡等ございましたらお願いいたします。よろしいでしょうか。

それでは、次回会議の日程につきまして、今回資料をお送りさせていただいた際に、次回会議を7月下旬で日程調整票を送らせていただいたかと思います。恐れ入りますが、この会議が終わりましたら事務局のほうに回収させていただきまして、追って明日、明後日中くらいには日程調整後、ご連絡させていただきたいと思いますので、よろしくお願いいたします。

次回は、本日いただいたご意見を整理しまして、新しいビジョンの骨子、骨となる部分、それから成果の指標についてももう少し具体的なものをお出ししていきたいと思っておりますし、文化プログラムの修正などについて事務局案を提示して、ご意見をいただきたいと思いますと考えております。

以上をもちまして、第1回新潟市文化創造推進委員会を閉会いたします。

本日は、お忙しい中お集まりいただきまして、また長時間にわたりまして

ご意見をいただきありがとうございました。

7 閉 会